

2010新春鼎談 杉之原氏の業績を語り 逆流現象を検証

出席者

全国人権連議長

丹波正史氏
たんばせいし

元兵庫部落研事務局長

鳥飼慶陽氏
とりがいけいよう

部落問題研究所常務理事

尾川昌法氏
おがわまさのり

司会 「地域と人権」編集長

植山光朗氏
うえやまみつろう



なごやかに新春鼎談(右から丹波議長、尾川氏、鳥飼氏、植山編集長)

今年、国は地対財特法が終結して8年目を迎え、同和行政をめぐる都府県や市町村の状況は、大きな流れでは縮小傾向にあります。昨年、マスコミや出版界では「まだ差別意識は根強い。解決したという主張は現実を見ないたわごと」とする論調が目立ち、部落問題の逆流現象が見られます。国民融合論の第一人者として「解同」などの部落解放の「虚構理論」を厳しく批判した杉之原寿一神戸大名大学教授(昨年7月死去)の業績を語ることで、昨今の逆流現象を批判的に検証します。

鼎談にあたって

植山 新年おめでとうございます。さて、同和特別行政は国の段階では2002年3月に終結しましたが、地方自治体での同和行政や同和教育行政の終結の現状をみると、少なからず終わっていないところが多い。その一方で、野中広務氏と辛淑玉氏の『差別と日本人』、組坂繁之氏と高山文彦氏の『対論 部落問題』、栗原美和子氏の小説『太郎が恋をする頃までは...』など「部落差別はまだ根強く残っている」とする論調の出版が昨今、相次ぎ、部落問題解決の現



「後見役的存在」と語る丹波議長

状を軽視した、部分的、個別的な現象を恣意的に一般化する傾向にありま

す。私たち全国人権連は昨年11月、はじめて東京都内でマスコミ、出版関係、企業などを対象にした「同和問題セミナー」を開き、同和行政をめぐる動向や地方でのとりくみを語りあいました。国政との絡みで言えば、国民生活よりアメリカ、大企業優先の自公政権から民主党政権に変わったが、千葉景子法務大臣は就任あいさつで「人権侵害救済法の早期制定」を述べ、同和問題解決の観点から見ればこのような状況は非常に危険です。

全解連運動の後見役

丹波 私と先生の出会い、30年ほど前からです。私が全解連の書記次長

のとき貴重な助言をいただいた記憶があります。その後、全解連主催の研究集会では同和行政などで助言をいただいた。87年の総務庁の「地域改善対策啓発推進指針」にたいする全解連の啓発方針の検討研究には先生のアドバイスが非常に参考になったものです。全解連運動にとって杉之原先生は後見役的存在でしたね。

それぞれ立場から縦横無尽に語っていただけると、新春の鼎談を設けました。2010年の年明けにふさわしい展望のある鼎談をお願いします。最初に全国人権連議長の丹波さんから。

尾川 99年、杉之原さんが研究所理事長として最後の4年間、私が常務理事・理事としての付き合いが濃厚。最初に出会ったのは90年。研究所のこの部屋で、私はオーストラリアのアポリジニについて発表したとき、杉之原さんは「アポリジニの主食はなにかね」と、とても熱心に質問されたことが記憶に残っています。先住民の研究がなかったのでしょうか。それ以来、長い付き合いになりましたね。

国民融合運動の旗手

丹波 先生は部落問題の論文を一番多く書かれた。教育と文芸、歴史を除いて論究されてきた。今後、もう先生のような人はないでしょうね。全ての学問的な関心をもってきたのが特徴。(部落問題や同和行政を)知ってもらうことに努力された。(市民や関係者に)正しい認識を広げましたね。生活を裂いて部落問題の著作を出版され、犠牲的な精神を払った。理論闘争には戦闘的でしたね。運動論や差別論、部落差別論を深めた。戦後



「先生とは40年のお付き合い」と鳥飼氏

の部落解放論とその理論、とりわけ国民融合論批判への批判はもっとも戦闘的でした。国民融合運動の旗手の役割を果たされた。学ぶところがありますね。

尾川 研究所では毎年一回、研究や運動、行政など関連の年表を月刊誌に出しますが、関連の年表は杉之原先生がワープロで作っていたのを元にしていました。

丹波 整理整頓を実証していくスタイルでしたね。2005年に愛知人権ネットが発行した『隠蔽された現代史』部落解放運動の分裂と全解連のたたかいも先生のフロッピーが役立った。記録を几帳面にまとめられる。みんなが助かっています。

鳥飼 資料収集は広い集め方をされていましてね。資料という物はこういう風にまとめるものだという感じでしたね。

尾川 それが杉之原さんの特徴でしたね。最後の著作も『部落問題に関する現代文献・資料目録』(805頁)で貴重なものです。すべて個人であつめた。社会学者として真骨頂で、この『目録』は代表作のひとつということに誰も異論はないと思います。

「部落って何ですか」

植山 部落問題や全解連運動への先生のかかわりをもっと少し具体的に。

尾川 部落問題とのかかわりの発端は、木村京太郎さんから「死ぬまでこの問題に取り組みの」といわれたから、というのは有名な話ですが、その前の話がありまして。先生は社会思想史を研究しようとしていた。

京都大人文研の助手時代、京都の勤労者学習協会の講師をしていたとき、若い女性受講生から「先生は労働者問題をやるが部落問題はどうか」と質問され、「部落ってなんですか」と反対に聞き返したと言います。そこで彼女に連れら

れて部落を見に行くことになった。部落の実態を見て先生は悲惨さに驚き、腹が立った。そのときから「部落を研究しなければ」と決意されたそうです。この出会いが1期。神戸などでの実態調査が第2期。神戸での研究所設立から先生の取組みが本格化する。解同との理論闘争と国民融合論の形成という激烈なたたかいの時期、そう続くのではないのでしょうか。

丹波 木村さんの出会いが出発。木村さんの言葉が先生に「反作用」を。先生には弟子という後継者がいなかった。なぜ、弟子をつくらなかったのか？

鳥飼 神戸大学に社会調査室をつくり、同僚の教授や大学院生たちが群れていましたね。調査にも加わってもらいましたが、先生は弟子づくりなどされませんでした。

尾川 社会学の分野で学問的進歩のために重要な役割を果たしたのではないかと。社会学の方法論が確立していない時代だったから、課題を調査し計

算、分析し、社会学はなにをしなければならぬかを提起したのです。実践科学としての社会学を提起したのです。

鳥飼 先生は何のために調査をするのか。現場の声、運動している人たちの生の声を聞く。行政担当者や現場とのやり取りで対話しながら調査を仕上げ分析し活かしてこられた。当時は、今みたいに電子計算機、パソコンなどない時代。計算尺で計算するなど一つ一つが手作業の時代。先生の努力は大変だった。神戸の場合、若い活動家の声をよく聞きながら調査項目を丁寧に確定する。傍らでみて、そういうものを大切にしておられた。調整能力の高い先生だった。なによりも部落問題を解決するという運動家みたいな意欲が感じられましたね。神戸の同和行政と解放運動が自身の足場でもありました。

尾川 はっきりと書いています。「大衆との対話で調査ができる。理論は運動のための指針にならない」。戦闘的という評価は、思います。「社会学は実践の科学」と言っています。

丹波 地対協の意見具申などの政府文書にも(先生の理論は)取り入れられた。現実政治を動かせる理論の強さ。現実の政治を変えていくのが戦闘的な理論ですね。

鳥飼 行政関係者にファンも多くいましたね。特に同和行政の終結をはかる段階では。

植山 同和問題の研究集会では、とりわけ同和行政の分析、意識調査の分析で行政担当者の関心が高かった。だから杉之原講演には人がよく集まった。

丹波 同和行政をどう考えるか。(部落内外の)格差論。主体的な解決。法はどうかあるべきか。内容を理論的に解明するなど、差別問題解決の行政の役割や教訓になることを導いた。

鳥飼 先生の考えは、特別対策法のベースは居住者すべてを対象にした属地という原則でした。「同和」という物差しで曲げていかなければいけないというのを買っていた。

尾川 同和行政研究がその柱でしたね。実践的にならざるを得ない時代でもあった。そこで先生も成長していった。

鳥飼 新しい発信は神戸でした。

尾川 神戸の研究所は杉之原研究所みただった。そうでした。

尾川 部落問題研究を専攻した唯一の社会学者だと思ふ。理論的研究の集大成といっている作品は84年に野呂采太郎賞を受賞した『現代部落差別の研究』。朝田理論の3つの命題の一つひとつを丁寧に批判している。重要な点は2つ。一つは差別の拡大再生産論の徹底的批判。部落差別は実証的に解消していることを証明し朝田理論を覆した。もう一つは社会問題としての部落問題は資本主義社会で解決できることを明確にしたこと。

鳥飼 論争でも相手の意見をよく聞かれました。学問的誠実さですかね。分からないことについても「僕はわからないのだ」と言っている。

丹波 「啓発と絡んでの意識論。このベースになったのは、G・ルカーチの『歴史と階級意識』、あれが僕の基礎だ」と言っておられた。いま観念的な部落差別論の横行が出版界を中心に



植山 務めるを司会編集長

人が、オールマイティーでやってきたが、今後は、いろんな学問分野が共同でテーブルに着き社会学、歴史学、哲学などで差別論を深めていかなければいけない。扇の要になる大事な作業が私たちにもとめられているのではないかと。それが杉之原さんの功績を活かすことになる。

鳥飼 先生の人と業績についての批判的吟味は欠かせませんね。偉大な先生であればあるほどそれが必要ですね。

鳥飼 先生の人と業績についての批判的吟味は欠かせませんね。偉大な先生であればあるほどそれが必要ですね。

差別意識の問題

丹波 差別意識の論調。意識の問題をどう考えるか。今日の段階では生きてものになっていない。身分論、歴史家だけだすむのか。いろんな人から見なければいけない。もうひとつ民主主義の問題。政治的な民主主義の成熟だけでおさまるのか。生活領域も入れた民主主義論が必要。そのことが地域人権運動を前進させてい

てきていける。歴史を今日の課題として、今の時点を確認する作業をしないといけないのではないかと。部落の障壁がなくなった状態が新しい市民の誕生。地域権利憲章の実現は、そう単純なものの方ではできない。

鳥飼 部落問題の枠組みから行政も運動もふっされる必要がありますね。

尾川 解消過程と市民社会の問題、残された課題を進展させることは重要だ。差別意識論、現代における身分論、現代の民主主義論。民主主義が人権の理論、システムと

尾川 解消過程と市民社会の問題、残された課題を進展させることは重要だ。差別意識論、現代における身分論、現代の民主主義論。民主主義が人権の理論、システムと

ていこう発展していくのか。制度、思想、運動、生活規範としての4つのレベルで民主主義をはかっていく。新しい市民社会、独立資本をコントロールできる市民社会。研究課題のひとつですね。

丹波 『自立・自治・融合』という本を書いたが、生活領域で変わらないと本当に変わらない。その意味で大事な時期だと思ふ。古い共同体の崩れ、共同体が崩壊状態にある。新しい共同体をどうするかが問われている。

尾川 人権連の地域権利憲章に期待している。4つのレベルの民主主義、総体として民主主義の発展の表現として、ですね。

鳥飼 街づくりの運動を築くことと。小さなことが形になる。

植山 杉之原先生の業績を今後の運動にどう継承発展させていくのか。同和行政の終結やマスコミなどの差別意識論の逆流現象、地域における街づくりと民主主義の実現、人権連のこれからの運動、地域権利憲章などについて、有意義な示唆をいただき、貴重な鼎談になりました。長時間にわたり、ありがとうございました。

など未開社会の実態調査にも従事されています。しかし、昭和45年以降は部落問題の研究に専念され、その成果は『杉之原先生 部落問題著作集』(全8巻)に結実されています。そして、昭和59年には『現代部落差別の研究』において野呂采太郎賞を受賞されています。なお平成9年現在、『著作集』は全20巻になっております。

紹介

杉之原先生の主な著作と経歴

杉之原寿一先生は、大正12年1月15日に生まれ、昭和22年京都帝国大学文学部を卒業、京都大学人文科学研究所助手を経て、昭和26年神戸大学文学部講師に赴任。

杉之原先生は、テンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(岩波文庫)の名訳で有名ですが、実は学生時代に訳されたものだそうです。

著作22冊、翻訳5冊、論文は実に1000冊を数え、各方面に研究業績をあげられました。

研究内容は、京都大学人文科学研究所時代は、フランス百科全集派やルソーの研究と、但馬における親方・子方関係の研究があり、神戸大学にいられたころは昭和45年までは労働者意識論が中心になっています。その間、ポリネシア、フィジー、ニュージールランド

※神戸大学「社会学雑誌」第3号(1986年3月)を参照。



「実践的社会学を確立」と尾川氏